

パネル発表

21 世紀のジャカルタはどう変わったか —アトラスを通じた人文情報学の実践—

How has Jakarta changed in the 21st century:
Digital Humanities Practice Through Atlas

趣旨説明

About the Panel

三村 豊 (総合地球環境学研究所)

Yutaka Mimura (Research Institute for Humanity and Nature)

本報告では、ジャカルタ都市圏における開発動向や発展経路について人文情報学 (DH : Digital Humanities) のアプローチで明らかにし、その成果物『ジャカルタ・アトラス—地図でみる都市の成熟¹⁾』(以下、本書) の紹介を通じて、21 世紀の都市の「成熟」や分野横断型の研究における課題と展望について議論する。

本報告では、ジャカルタ都市圏における都市や農村地域において日々の暮らしの面が何が変わったのかを軸にして、村落潜在力調査 (Pendataan Potensi Desa: 通称 PODES) を用いて 2000 年から 2020 年までの 20 年間の統計地理に基づくマイクロとマクロスケールを横断した分析や考察について発表する。

最初の報告者の吉田航太は、本書の各章で得られた知見について概観し、PODES の分析可能性について報告する。次に新井健一郎は、21 世紀の約 20 年間におけるジャカルタ都市圏の変化と地域差の考察を通じて「新興国都市の成熟」について報告する。最後に小泉佑介は、インドネシア地域研究への応用として地域情報学の新たな可能性について報告する。また、パネルディスカッションでは、本書の作成に関わった林憲吾 (東京大学)、塩寺さとみ (南山大学)、田川昇平 (東洋大学) が『アトラス』から見えてきたことについて論点を提示し、全体ディスカッションを行う。

人文情報学とは、人文学的問題について情報学的手法を用いて解くことにより新しい知識や視点を得る、人文学と情報学を融合した学問である。本書の作成に関わったメンバーは、地理学、建築学、文化人類学、生態学、社会学など多岐にわたるが、「ジャカルタ研究」や「マイクロ・マクロ研究」というキーワードに興味や感心を示すものの、当初、分野横断型による研究体制で「うまく成果がでるのか」と懐疑的であった。本書は 2024 年 3 月に発行できているが、改めてメンバー間で議論することが、インドネシア研究や分野横断型の研究活動の新たな学問領域の開拓につながると期待している。

1) 『ジャカルタ・アトラス—地図でみる都市の成熟』は、デジタルブック (<https://www.soc.hit-u.ac.jp/~geography/atlas.html>) より閲覧することができます。

発表者①

『ジャカルタ・アトラス』の概要

－「開発」志向の統計データの再構成と「すきま」の発見－

Outline of *Jakarta Atlas*:

Reconstitution of Developmentalist Statistic Data for Unintentional Insights

吉田航太（静岡県立大学）

Kota Yoshida (The University of Shizuoka)

本報告では、『ジャカルタ・アトラス』における各章の内容を簡単に紹介しつつ、150枚の地図をどのような構成で並べたのか、そしてそこからいかなる知見が得られたのかについて解説する。本書では、宗教や民族といったインドネシア地域研究で定番の項目からこれまであまり注目されてこなかった日常生活の細部に至るまで、大きく分けて、過去20年間のジャカルタ首都圏（ジャボデタベック）で生じた全体的な変化および地域ごとの多様性の2点について明らかにすることができた。

第1章では、ジャカルタ首都圏の歴史的背景や地理的特徴を解説し、第2章では、住宅地や土地利用、生業などの変化をもとに、「デサコタ」論の再検討という形で全体像を提示した。第3章では、この20年で大きく変化した、街灯の設置や台所の燃料、トイレの設備など、身体に根ざす日常性の次元でどのような変化があったかを読み解いた。第4章では、ジャカルタの人々の生活に関わる医療サービスや宗教、娯楽施設といったソフトな側面に注目し、第5章では、特定の地域に集積している手工業などの、ジャカルタ全体の傾向というよりも興味深いミクロな外れ値を「発展のすきま」として取り上げた。

本書の構成の特徴として、各章はもともとの PODES（村落潜在力調査）の構成を準拠するというよりも、研究会での議論を通じてボトムアップに作り上げた点が挙げられる。本報告では、PODES の構成とも比較しながら本書の執筆プロセスを説明し、インドネシア政府による「開発」志向の統計データの一種の「転用」可能性について論じた。また本書の限界や、今後別データを用いたさらなる分析の可能性についても簡単に触れる。

発表者②

問題発見的問いとしての都市の成熟

Maturation of a city: heuristic question

新井 健一郎 (亜細亜大学 都市創造学部)

Kenichiro Arai (Faculty of Urban Innovation, Asia University)

本報告では、『ジャカルタ・アトラス』作成の背景となった科研共同研究において探究テーマとなった「都市の成熟」について、背景と趣旨を説明する。

報告者は、科研基盤研究 C「21 世紀ジャカルタ都市圏の人口安定・世代変化・都市の成熟に関する研究」の研究代表をつとめた。それ以前の研究において、報告者はジャカルタ都市圏を主に開発（都市開発・不動産開発）に伴う問題系から研究していた。具体的には、大型都市開発事業による都市空間の物理的な変化、その背後にある政治経済学的な力学、物理的な空間分節の変化に伴う新しい包摂や排除、新たな生活様式や価値観、といった問題群である。

今回、地理情報学、人文地理学、建築史など多様な研究分野の研究者と 21 世紀のジャカルタ都市圏について共同研究をするにあたり、空間的なセグレーションとは違う変化を把握・可視化することを目指した。その際、問題発見的ツールとして設定した問いが、「新興国都市の成熟はどのようなあり方をとるか」というものである。

ジャカルタの人口増加率のピークは 20 世紀末後期であり、21 世紀以降はすでにピークを超えている。高い人口増加率の背後には後背地農山漁村・地方都市からの膨大な人口流入があったため、人口増加率の低下は、流入人口の鈍化をも意味する。

都市人口の中で出稼ぎ民の比重が減り、首都圏生まれ・首都圏育ちが主流化すれば、必ずライフスタイル、住まい方や交流の仕方等にも変化があるはずである。それらの変化の中には、所得・階級の差を超えた横断的なものがあるだろうか。逆に、それらの変化は都市圏内部で、どのような偏差を伴っているだろうか。それらの変化を、「先進一後進」とは違う視点で発見するために、「成熟」という用語は有効だと考えた。

当初の予定では、分析データとして主にセンサスを利用し、人口動態に注目することを考えていたが、検討の末、PODES に変更した。その結果、夜の街路の明るさ、排泄の場所、飲料水や生活用水の入手方法等、生活史的な側面を含め、極めて多彩な側面について、21 世紀の約 20 年間におけるジャカルタ都市圏の変化と地域差を明らかにすることができた。

発表者③

地域情報学の新たな可能性

—社会地図を通じた学際的な「対話」の実践とそこから見えてきたこと—

Rethinking area informatics and its possibility:

Some insight from interdisciplinary dialogues with social maps

小泉 佑介 (一橋大学)

Yusuke Koizumi (Hitotsubashi University)

本報告では、『ジャカルタ・アトラス』(以下、本書) で用いた 150 枚を超える「社会地図」の作成・分析プロセスを解説した上で、そこで得られた知見をもとに、地域研究と情報学の融合を目指してきた「地域情報学」に対する新たな可能性を検討してみたい。

本書では、ジャカルタという巨大な都市空間の構造変化を捉える上で、中央統計庁 (Badan Pusat Statistik) の基幹統計の 1 つである村落潜在力調査 (Pendataan Potensi Desa: 通称 PODES) のデータを用いた。PODES とは、インドネシアにおけるすべての町・村役場 (2020 年は 83,556) を対象として、人口や世帯に関する基本情報から、農地面積、交通手段、災害対策といった多様な情報を収集したものであり、政府の開発計画においても重要な統計の 1 つに位置づけられている。一方、PODES の質問項目は 200 ~300 にものぼり、膨大かつ煩雑な「下準備」が求められるため、これまで部分的な項目を取り上げた研究はあっても、それを網羅的に分析しようとする試みは管見の限り存在しない。逆に言えば、そこに新たな研究の可能性が眠っているともいえよう。

本書の特徴は、地理学、建築学、人類学、社会学、生態学、政策学といった様々な分野／領域を横断する「対話」を実践してきたことにある。具体的には、PODES における 200 以上の質問項目をくまなく検討し、3 時点の変化を見るために 500 枚もの地図を実際に床に並べながら綿密な議論を重ね、その成果を多様な視点に基づくグラフィカルな地図帳としてまとめ上げてきた。こうした「対話」を通じたアトラスの作成という手法自体が、従来の研究とは異なる試みであったといえよう。

加えて、本書の特筆すべき点は、グラフィック・デザインが専門である中野豪雄氏 (武蔵野美術大学) に地図の配色や装丁全般を依頼し、単なる「地図帳」を越えた作品に仕上げたことにある。こうしたデザイナーとの共同制作という過程も、これまでの地域情報学における様々な試みに対して、新たな知見をもたらすのではないかと考える。